

フ

フラワーレメディ（花の療法）を生業とする僕にとって、関わりの深い沖縄の植物のひとつがパパイヤだ。僕は愛着を込め、パパイヤと呼ぶ。詳細は自著に委ねるが、彼らは類稀とも言える、性エネルギーをコントロールする生態を持つ。パパイヤには雄と雌の株があって、食用となる実を持つのは雌株だが、なぜか彼らは性の制約を越えることができる。去年まで雄だった株が、今年は雌になったりするのだ。しかも雄株でさえ、その気になれば結実することもできる。この特徴的な生態を知った僕は、4年前の夏、結実した雄株の花でフラワーレメディの母液を作った。完成したパパイヤの一滴は、赤ちゃんを切望する夫婦に福音を届け、スカートを穿けぬ女性たちや、立ち振る舞いの凛とせぬ男性たちに、自らと向き合うチャンスを提供することとなった。この療法で製薬に花を用いるのは、完璧に開花した花は、自らをしっかりと受け容れ、その使命をまっとうしたエネルギーを有すると考えるためだ。そのため、過去や家族を意味する根も、生き様を支える茎や葉も、未来や子孫を意味する種子も、植物を特定する際の重要な決め手となる。

パパイヤは実の付き方といい、種子の数といい、大家族を連想させる植物だ。その実ひとつで、大勢の胃袋を満足させることもできる。しかし残念ながら、ここ沖縄でも本土同様、家族の規模は小さくなる一方であり、パパイヤの実を持って余す家も少なくない。プライバシーを尊重する若い人々は小規模な家族を好むが、家族が小さくなればなるほど、ひとりの家人の及ぼす家全体への影響は大きく、その逆もまた真となる。その結果、昔だったから気にならなかったような些細な事が、小さくなった核家族では、一大事となることさえある。しかも老人不在の家では、子供たちの

## 子育ての実

ふたりのまいにち 34 essay  
文・ゆうすけ



イラストレーション・齋藤萌

教育を学校や塾、マスコミに委ね、世間と同じで無いことに危機感さえ抱くようになってしまった。こうした状態が、果たして命のリレーと言えるのだろうか。子供と向き合うということは、その家に先祖代々脈々と継承された生き様を、大切に繋いでいくことでもあるはずだ。

自然療法以外にも、パパイヤは授乳期の母親を助ける子育ての実としても、特に沖縄や台湾では良く知られる。パパイヤの旬が、生命力の低下しかねない食欲の落ちる盛夏でもあり、さらには、無農薬でもしっかりと育つ遅しさをあわせ持つ。そんな生命力豊かな食材を、加熱するのはもったいない。パパイヤの青い実を優しくシリシリにし、大きめのザルで大胆に水洗いし、良く水を切る。胡瓜やセロリを同じ形に切り揃え、島ニンニクと昆布を漬け込んだ醤油に、胡麻油とシークワサ果汁を合わせた濃い目のタレで混ぜ合わせれば、猛暑を乗り切るおかずサラダが完成する。水茶漬けに、たっぷりトッピングしても美味しい。感謝と共にしっかりと食べ、子供たちに家系の糧を渡す自分という存在に、代走者のいないことを噛み締めることから始めよう。



フラワーレメディスト、作家、エッセイスト、シンガソングライター。目の故障をきっかけに、20年に渡るロボットエンジニアのキャリアを捨て、沖縄に移住。自らのパニック障害を通じてフラワーレメディに出会い、専門店を北中城村に開く。継続し易い本療法の実践と独自監修した教育プログラムの提供に加え、沖縄の植物によるレメディ作りにも取り組む。2009年の初著出版後、エコロジカルな生活に目覚め、純菜食者となった。

- 花療法ひかりあめのホームページ…<http://hikariame.jp>
- ゆうすけのブログ…<http://healingherbs.jp/>
- イラストレータ萌のホームページ…<http://hikari.nu/>